

承諾獲得方略の使用に及ぼす 方略の有効性と適切性の影響

深田博己・戸塚唯氏・湯 永隆

(2002年9月30日受理)

The effects of effectiveness and appropriateness of compliance-gaining strategies on the use of them

Hiromi Fukada, Tadashi Tozuka, and Yung Lung Tang

The purpose of this study was to explore the effects of effectiveness and appropriateness of compliance-gaining strategies on the use of them by manipulating two situational factors. The independent variables were intimacy between dyad (high, low) and perceived resistance (high, low), and the dependent variables were properties of strategies (effectiveness and three types of appropriateness) and the use of strategies. Two hundred and twenty-four university students (112 men and 112 women) were assigned to one of four experimental groups. The results of ANOVA showed that some properties of strategies were affected by situational factors, though these effects were not so powerful. In addition, six path analyses were conducted to explore the effects of effectiveness and appropriateness of strategies on the use of them. The results showed that effectiveness and appropriateness of strategies affected the use of them. Particularly, effectiveness had the strongest effect of all independent variables in all analyses.

Key words: compliance-gaining strategies, property of strategy, effectiveness of strategy, appropriateness of strategy, situational factors

キーワード：承諾獲得方略，方略の性質，方略の有効性，方略の適切性，場面要因

問 題

承諾獲得方略とは、他者を自分の望むように行動させるための方略のうち、他者からの承諾を得るために用いられる一連のコミュニケーション方略である。承諾獲得方略の基礎単位となる単一のコミュニケーションを承諾獲得方策という。本研究では、承諾獲得方策因子、すなわち承諾獲得方策群を承諾獲得方略と呼ぶ。

日本人大学生を調査対象者とした湯（2002）は、演繹的方法と帰納的方法の特徴を併せ持つ中間型の承諾獲得方策リストの作成を試みた。その結果、「個人評価方略」「制裁方略」「対人技能方略」「丁重方略」「他者利用方略」「強硬方略」の6方略（6方策因子）・全29方策から成る承諾獲得方策リストを作成し、その

構造を明らかにした。そして、それらの6つの承諾獲得方略の使用可能性が場面次元要因によってどのように異なるのかについて、Cody & McLaughlin（1980）の場面次元を利用して検討した。Cody & McLaughlin（1980）の場面次元は、①要請者と被要請者の親密度、②要請者に対する被要請者の地位、③要請者によって知覚された被要請者の抵抗、④要請の正当性、⑤二者関係への長期的影響、⑥承諾によって得られる要請者あるいは他者の利益の6場面次元であった。これらの場面次元ごとに2水準の場面要因が承諾獲得方略の使用可能性に及ぼす影響を検討した結果、地位、正当性、自己利益の3場面次元要因の影響が明らかとなった。

なお、未発表資料ではあるが、湯（2002）の承諾獲得方策リストを用いた北村・谷渕・南・森田・米澤

(2000) は、6つの承諾獲得方略の使用可能性に及ぼす抵抗要因と親密度要因の交互作用効果および抵抗要因と地位要因の交互作用効果を検討した。その結果、対人技能方略、丁重方略、および他者利用方略の使用可能性に及ぼす抵抗要因と親密度要因の交互作用効果の存在が解明された。

ところで、承諾獲得方略の使用可能性に及ぼす要因として、深田(1998)は、その方略の使用がどの程度承諾獲得に効果的であるかという方略の有効性の要因だけでなく、その方略の使用がいかん被要請者の感情を傷つけずにすむかという方略の適切性の要因を指摘している。こうした方略自体のもつ有効性や適切性といった性質は、場面要因と交互作用しながら、方略の使用可能性を規定すると予想されるので、方略自体がもつ性質(有効性と適切性)が方略の使用可能性に及ぼす影響を検討する必要がある。すなわち、場面要因の影響を配慮しつつ、承諾獲得方略の使用可能性と有効性あるいは適切性との関係を検討しなければならない。

その際、承諾獲得場面の種類によって、個々の承諾獲得方略のもつ有効性や適切性が変動することも十分予想できる。したがって、承諾獲得方略の有効性および適切性に及ぼす場面要因の影響を併せて検討しておく必要がある。

本研究の目的は、有効性および適切性といった承諾獲得方略自体のもつ性質が承諾獲得方略の使用可能性に及ぼす影響を検討することである。なお、本研究では、湯(2002)の作成した承諾獲得方略リストの短縮版を利用する。また、北村ら(2000)によって、承諾獲得方略の使用可能性に及ぼす有意な交互作用効果が発見された抵抗場面要因と親密度場面要因を利用する。

方法

実験計画と被験者

親密度(高、低)と抵抗度(高、低)を独立変数(どちらも被験者間変数)として2×2の4条件を設けた。

被験者は広島県内の大学生268名であった。質問項目への回答に記入ミスのある者を除外し、さらに各条件における男女の比率を一定にするため無作為にデータを削除した結果、最終的な分析対象者は224名となった(各条件とも男性28名、女性28名の計56名)。平均年齢は19.36歳(18歳～29歳)であった。

実験手続き

実験は大学の講義時間を利用して行った。まず被験者に4種類の小冊子のいずれかを無作為に配布し、口頭および小冊子の表紙で教示を行った。小冊子の題目

は「大学生の他者への頼み方に関する調査」であり、回答時間は約20分間であった。実験には場面想定法を用いた。すなわち、実験者が提示した状況に自分自身が置かれていることを被験者に想像させた上で、各承諾獲得方略に関する諸反応を測定した。

実験材料

要因の操作 親密度要因と抵抗度要因の操作は、仮想させる物品借用要請場面における、相手との親しさの程度、承諾してくれる可能性の程度で操作した。すなわち、高親密度条件では親しい人(親友など)にモノ(カメラ、パソコンなど)を借りる状況を、低親密度条件では疎遠な人(面識はあるが、ほとんど付き合いのない人など)にモノ(同上)を借りる状況を想定させた。また高抵抗度条件では相手が承諾してくれる可能性が低い状況を、低抵抗度条件では相手が承諾してくれる可能性が高い状況を想定させた。

承諾獲得方略リスト 使用した承諾獲得方略は、湯(2002)の承諾獲得方略リストから抜粋した18方略である。湯(2002)のリストは、本来、6因子(個人評価、制裁、対人技能、丁重、他者利用、強硬)・全29方略から成るものであるが、そのまま用いると質問項目の数が多くなりすぎ、被験者の負担が大きくなると思われたため、湯(2002)の因子分析の結果に基づき、各因子に負荷量の大きかった3項目ずつを抜粋し使用した(使用した18方略については補助資料を参照)。以下本研究では、各方略因子(3項目から成る方略群)を「方略」と表記する。

従属変数の測定

要請者にとっての方策の適切性 被験者(要請者)が想定場面で各方略を使用して頼み事をした場合、被験者自身がどの程度不快な気持ちになると思うかを評定させた(4段階尺度;全く不快な気持ちにならない4点～非常に不快な気持ちになると思う1点)。なお分析においては、各方略に属する方略の平均点を算出し、それを各方略における「要請者にとっての適切性得点」として使用した。

被要請者にとっての方策の適切性 被験者(要請者)が想定場面で各方略を使用して頼み事をした場合、被要請者がどの程度不快な気持ちになると思うかを被験者に評定させた(4段階尺度;全く不快な気持ちにならない4点～非常に不快な気持ちになると思う1点)。なお分析においては、各方略に属する方略の平均点を算出し、それを各方略における「被要請者に

としての適切性得点」として使用した。

周囲の人にとっての方策の適切性 被験者（要請者）が想定場面で各方策を使用して頼み事をした場合、周囲の人がどの程度不快な気持ちになると思うかを被験者に評定させた（4段階尺度；全く不快な気持ちになると思わない4点～非常に不快な気持ちになると思う1点）。なお分析においては、各方略に属する方策の平均点を算出し、それを各方略における「周囲の人にとっての適切性得点」として使用した。

方策の有効性 被験者（要請者）が想定場面で各方策を使用して頼み事をした場合、被要請者がどの程度承諾する気持ちになると思うかを被験者に評定させた（4段階尺度；非常に承諾する気持ちになると思う4点～全く承諾する気持ちにならないと思う1点）。なお分析においては、各方略に属する方策の平均点を算出し、それを各方略における「有効性得点」として使用した。

方策の使用可能性 被験者（要請者）が想定場面で各方策を使用する可能性がどの程度あるかを評定させた（4段階尺度；非常に可能性がある4点～可能性が全くない1点）。なお分析においては、各方略に属する方策の平均点を算出し、それを各方略における「使用可能性得点」として使用した。

結 果

実験操作要因の効果に関する検討（実験1）

等分散性の検定 分散分析において従属変数として使用する、方略ごとの適切性得点（3種類）、有効性得点、使用可能性得点に関して、Bartlettの検定を行ったところ、これらの得点の分散が4条件間で異なることが明らかとなった。分散分析を行うためには各条件の等分散性が保障される必要があるため、本研究ではこれらの得点を開平方変換（ $y = \sqrt{x+0.5}$ ）した上で、以下の分析を行った。変換後の各従属変数の得点を表1に示す。

要請者にとっての適切性に与える実験操作要因の効果

要請者にとっての適切性得点を従属変数として、方略ごとに2要因の分散分析を計6回行った（表2）。その結果、いずれの方略においても主効果、交互作用は見いだされなかった。

被要請者にとっての適切性に与える実験操作要因の効

果 被要請者にとっての適切性得点を従属変数として、方略ごとに2要因の分散分析を計6回行った（表2）。

その結果、強硬方略において親密度の主効果（ $F(1, 220) = 7.42, p < .01$ ）と抵抗度の主効果（ $F(1, 220) = 12.72, p < .01$ ）が見いだされた。すなわち、低親密度条件（ $M = 1.60, SD = 0.16$ ）よりも高親密度条件（ $M = 1.66, SD = 0.15$ ）の方が、また高抵抗度条件（ $M = 1.59, SD = 0.15$ ）よりも低抵抗度条件（ $M = 1.66, SD = 0.16$ ）の方が、被要請者にとっての適切性得点が大きかった。

周囲の人々にとっての適切性に与える実験操作要因の効果 周囲の人々にとっての適切性得点を従属変数として、方略ごとに2要因の分散分析を計6回行った（表2）。

その結果、個人評価方略において親密度の主効果（ $F(1, 220) = 5.11, p < .05$ ）と抵抗度の主効果（ $F(1, 220) = 4.52, p < .05$ ）が見いだされた。すなわち低親密度条件（ $M = 1.49, SD = 0.22$ ）よりも高親密度条件（ $M = 1.56, SD = 0.23$ ）の方が、また高抵抗度条件（ $M = 1.49, SD = 0.22$ ）よりも低抵抗度条件（ $M = 1.56, SD = 0.23$ ）の方が、周囲の人々にとっての適切性得点が大きかった。

また制裁方略において抵抗度の主効果（ $F(1, 220) = 9.53, p < .01$ ）が有意であった。すなわち、高抵抗度条件（ $M = 1.31, SD = 0.14$ ）よりも低抵抗度条件（ $M = 1.38, SD = 0.19$ ）の方が、周囲の人々にとっての適切性得点が大きかった。

丁重方略においては親密度の主効果（ $F(1, 220) = 4.56, p < .05$ ）が見いだされた。すなわち低親密度条件（ $M = 2.03, SD = 0.13$ ）よりも高親密度条件（ $M = 2.06, SD = 0.08$ ）の方が周囲の人々にとっての適切性得点が大きかった。さらに丁重方略においては、親密度と抵抗度の交互作用（ $F(1, 220) = 4.09, p < .05$ ）が見いだされたため、下位検定を行ったところ、高抵抗条件における親密度の単純主効果が見いだされた（ $F(1, 220) = 8.64, p < .01$ ）。すなわち、低親密-高抵抗条件（ $M = 2.02, SD = 0.14$ ）よりも高親密-高抵抗条件（ $M = 2.08, SD = 0.07$ ）の方が周囲の人々にとっての適切性得点が大きかった。

さらに強硬方略において、親密度の主効果（ $F(1, 220) = 7.48, p < .01$ ）と抵抗度の主効果（ $F(1, 220) = 4.40, p < .05$ ）が見いだされた。すなわち低親密度条件（ $M = 1.65, SD = 0.16$ ）よりも高親密度条件（ $M = 1.70, SD = 0.15$ ）の方が、また高抵抗度条件（ $M = 1.65, SD = 0.16$ ）よりも低抵抗度条件（ $M = 1.70, SD = 0.16$ ）の方が、周囲の人々にとつ

表 1. 従属変数の条件別平均値と標準偏差：開平変換後の値

従属変数	適切性 (要請者)						適切性 (周囲の人)						有効性						使用可能性					
	H			L			H			L			H			L			H			L		
	親密度	抵抗度	個人評価	親密度	抵抗度	個人評価	親密度	抵抗度	個人評価	親密度	抵抗度	個人評価	親密度	抵抗度	個人評価	親密度	抵抗度	個人評価	親密度	抵抗度	個人評価	親密度	抵抗度	個人評価
個人評価	M	1.61	1.65	1.56	1.56	1.49	1.52	1.44	1.44	1.52	1.60	1.47	1.51	1.50	1.54	1.48	1.48	1.48	1.33	1.30	1.29	1.32	1.32	1.32
	SD	(.25)	(.21)	(.23)	(.22)	(.23)	(.24)	(.21)	(.19)	(.24)	(.21)	(.20)	(.24)	(.23)	(.18)	(.22)	(.19)	(.22)	(.20)	(.12)	(.12)	(.12)	(.18)	(.18)
制裁	M	1.33	1.35	1.34	1.34	1.27	1.31	1.30	1.27	1.31	1.38	1.30	1.37	1.45	1.47	1.38	1.38	1.38	1.30	1.26	1.23	1.26	1.26	1.26
	SD	(.17)	(.16)	(.15)	(.14)	(.09)	(.13)	(.10)	(.13)	(.14)	(.20)	(.14)	(.18)	(.29)	(.26)	(.21)	(.25)	(.21)	(.21)	(.09)	(.03)	(.03)	(.15)	(.15)
対人技能	M	1.82	1.81	1.84	1.83	1.81	1.83	1.80	1.84	1.82	1.85	1.81	1.87	1.73	1.75	1.69	1.77	1.76	1.76	1.76	1.73	1.77	1.77	1.77
	SD	(.15)	(.12)	(.14)	(.16)	(.14)	(.14)	(.18)	(.15)	(.14)	(.15)	(.18)	(.17)	(.16)	(.15)	(.17)	(.15)	(.17)	(.14)	(.18)	(.18)	(.18)	(.18)	(.18)
丁重	M	2.02	2.01	2.02	2.04	2.02	2.03	1.98	2.02	2.08	2.05	2.02	2.05	1.89	1.95	1.90	1.96	1.96	1.93	1.93	1.92	1.94	1.94	1.94
	SD	(.11)	(.12)	(.11)	(.10)	(.13)	(.10)	(.16)	(.15)	(.07)	(.08)	(.14)	(.12)	(.22)	(.20)	(.18)	(.15)	(.18)	(.14)	(.18)	(.15)	(.15)	(.16)	(.16)
他者利用	M	1.77	1.79	1.81	1.80	1.77	1.78	1.74	1.81	1.82	1.83	1.77	1.82	1.76	1.77	1.72	1.77	1.72	1.61	1.62	1.60	1.62	1.62	1.62
	SD	(.16)	(.14)	(.16)	(.17)	(.17)	(.12)	(.17)	(.17)	(.15)	(.15)	(.20)	(.20)	(.16)	(.13)	(.15)	(.16)	(.16)	(.16)	(.15)	(.19)	(.19)	(.18)	(.18)
強硬	M	1.68	1.72	1.66	1.69	1.62	1.69	1.56	1.64	1.69	1.72	1.62	1.68	1.62	1.68	1.54	1.63	1.63	1.61	1.65	1.51	1.59	1.59	1.59
	SD	(.14)	(.16)	(.16)	(.16)	(.14)	(.16)	(.16)	(.15)	(.14)	(.17)	(.17)	(.15)	(.16)	(.15)	(.14)	(.15)	(.14)	(.14)	(.17)	(.13)	(.13)	(.13)	(.13)

注) 表中のH, Lは親密度および抵抗度要因の高条件, 低条件を表わす。

表 2. 2 要因分散分析の結果

従属変数	適切性 (要請者)						適切性 (周囲の人)						有効性						使用可能性								
	親密度			抵抗度			親×抵			親密度			抵抗度			親×抵			親密度			抵抗度			親×抵		
	効果	親密度	抵抗度	親×抵	親密度	抵抗度	親×抵	親密度	抵抗度	親×抵	親密度	抵抗度	親×抵	親密度	抵抗度	親×抵	親密度	抵抗度	親×抵	親密度	抵抗度	親×抵	親密度	抵抗度	親×抵		
個人評価					H>L*	H<L*																					
制裁						H<L**																					
対人技能														H<L*													
丁重																											
他者利用																											
強硬							H>L**																				

注 1) 表中の「親×抵」は親密度要因と抵抗度要因の交互作用を、「○」は交互作用が有意であることを表す。

注 2) 「H>L」, 「H<L」は当該の要因の主効果の存在を表わす。また「H>L」は高条件の方が低条件よりも得点が高いことを、「H<L」はその逆を表す。

注 3) *は p<.05 を, **は p<.01 を表す。

表3. 個人評価方略に関するパス解析 (標準偏回帰係数)

説明変数	基準変数				
	3	4	5	6	7
第1階層					
1 親密度	-.15 *	-.16 *	-.15 *	-.10	.03
2 抵抗度	.06	.05	.14 *	.05	-.03
第2階層					
3 適切性(要請者)					.12
4 適切性(被要請者)					.10
5 適切性(周囲の人)					-.02
6 有効性					.39 **
R ²	.03 *	.03 *	.04 **	.01	.24 **

注1) 基準変数の7は、使用可能性である。

注2) ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

注3) 親密度と抵抗度については、ダミー変数として低水準に0を、高水準に1を与えた。

表4. 制裁方略に関するパス解析 (標準偏回帰係数)

説明変数	基準変数				
	3	4	5	6	7
第1階層					
1 親密度	-.02	-.00	-.04	-.16 *	-.06
2 抵抗度	.03	.14 *	.20 **	.03	-.06
第2階層					
3 適切性(要請者)					.01
4 適切性(被要請者)					.19 *
5 適切性(周囲の人)					.04
6 有効性					.33 **
R ²	.00	.02	.04 **	.03 †	.17 **

注1) 基準変数の7は、使用可能性である。

注2) ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

注3) 親密度と抵抗度については、ダミー変数として低水準に0を、高水準に1を与えた。

表5. 対人技能方略に関するパス解析 (標準偏回帰係数)

説明変数	基準変数				
	3	4	5	6	7
第1階層					
1 親密度	.07	.00	.01	-.03	-.01
2 抵抗度	-.04	.09	.12 †	.17 *	-.01
第2階層					
3 適切性(要請者)					.12 †
4 適切性(被要請者)					.10
5 適切性(周囲の人)					.06
6 有効性					.35 **
R ²	.01	.01	.01	.03 *	.25 **

注1) 基準変数の7は、使用可能性である。

注2) ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

注3) 親密度と抵抗度については、ダミー変数として低水準に0を、高水準に1を与えた。

表6. 丁重方略に関するパス解析 (標準偏回帰係数)

説明変数	基準変数				
	3	4	5	6	7
第1階層					
1 親密度	.08	-.07	-.14 *	.02	.00
2 抵抗度	-.00	.10	.01	.16 *	-.03
第2階層					
3 適切性(要請者)					.15 *
4 適切性(被要請者)					.20 *
5 適切性(周囲の人)					-.02
6 有効性					.29 **
R ²	.01	.01	.02	.03 *	.18 **

注1) 基準変数の7は、使用可能性である。

注2) ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

注3) 親密度と抵抗度については、ダミー変数として低水準に0を、高水準に1を与えた。

表7. 他者利用方略に関するパス解析 (標準偏回帰係数)

説明変数	基準変数				
	3	4	5	6	7
第1階層					
1 親密度	.07	-.01	-.08	-.05	.01
2 抵抗度	.03	.13 †	.09	.11	-.02
第2階層					
3 適切性(要請者)					.16 *
4 適切性(被要請者)					.01
5 適切性(周囲の人)					.18 *
6 有効性					.28 **
R ²	.01	.02	.01	.01	.23 **

注1) 基準変数の7は、使用可能性である。

注2) ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

注3) 親密度と抵抗度については、ダミー変数として低水準に0を、高水準に1を与えた。

表8. 強硬方略に関するパス解析 (標準偏回帰係数)

説明変数	基準変数				
	3	4	5	6	7
第1階層					
1 親密度	-.10	-.18 **	-.18 **	-.20 **	-.14 **
2 抵抗度	.12 †	.23 **	.14 *	.23 **	.05
第2階層					
3 適切性(要請者)					.13 *
4 適切性(被要請者)					.20 *
5 適切性(周囲の人)					-.03
6 有効性					.39 **
R ²	.02 †	.08 **	.05 **	.10 **	.40 **

注1) 基準変数の7は、使用可能性である。

注2) ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

注3) 親密度と抵抗度については、ダミー変数として低水準に0を、高水準に1を与えた。

での適切性得点が大きかった。

有効性に与える実験操作要因の効果 有効性得点を従属変数として、方略ごとに2要因の分散分析を計6回行った(表2)。

その結果、対人技能方略において抵抗度の主効果 ($F(1, 220) = 6.28, p < .05$) が見いだされた。すなわち、高抵抗度条件 ($M = 1.71, SD = 0.16$) よりも低抵抗度条件 ($M = 1.76, SD = 0.15$) の方が、有効性得点が大きかった。

また強硬方略において、親密度の主効果 ($F(1, 220) = 10.04, p < .01$) と抵抗度の主効果 ($F(1, 220) = 13.23, p < .01$) が見いだされた。すなわち低親密度条件 ($M = 1.59, SD = 0.16$) よりも高親密度条件 ($M = 1.65, SD = 0.15$) の方が、また高抵抗度条件 ($M = 1.58, SD = 0.16$) よりも低抵抗度条件 ($M = 1.66, SD = 0.15$) の方が、有効性得点が大きかった。

使用可能性に与える実験操作要因の効果 使用可能性得点を従属変数として、方略ごとに2要因の分散分析を計6回行った(表2)。

その結果、強硬方略において親密度の主効果 ($F(1, 220) = 17.65, p < .01$) と抵抗度の主効果 ($F(1, 220) = 9.54, p < .01$) が見いだされた。すなわち、低親密度条件 ($M = 1.55, SD = 0.14$) よりも高親密度条件 ($M = 1.63, SD = 0.16$) の方が、また高抵抗度条件 ($M = 1.56, SD = 0.15$) よりも低抵抗度条

件 ($M = 1.62, SD = 0.16$) の方が、使用可能性得点が大きかった。

場面、適切性、有効性が、方略の使用可能性に及ぼす影響(分析2)

次に、場面(親密度, 抵抗度), 3種類の適切性, 有効性が、方略の使用可能性に及ぼす影響を検討するために、方略別にパス解析を行った。パス図(図1)では、第1階層にダミー変数として親密度と抵抗度を、第2階層に3種類の適切性および有効性を、第3階層(最終的な従属変数)に使用可能性を配置した。なおこのパス図では第2階層には第1階層からのパスを、第3階層には第1, 第2階層からのパスを設定した。

方略別の結果を表3~8に示す。まず場面(第1階層)から3種類の適切性・有効性(第2階層)への影響は、いずれの方略に関してもさほど大きなものではなかった。ただし、強硬方略の分析では、他の方略に比べて有意となるパスが多かった。また、場面(第1階層)から使用可能性(第3階層)への影響は、強硬方略における「親密度-使用可能性」のパス以外では見いだされなかった。一方、3種類の適切性・有効性(第2階層)から使用可能性(第3階層)への影響は、比較的大きいものであった。特に有効性から使用可能性への β 係数はいずれのパス解析でも有意であり、他の変数のそれに比べて大きかった。なお、使用可能性を従属変数とした場合の R^2 は、.17~.40であり、方略によって幅があった。

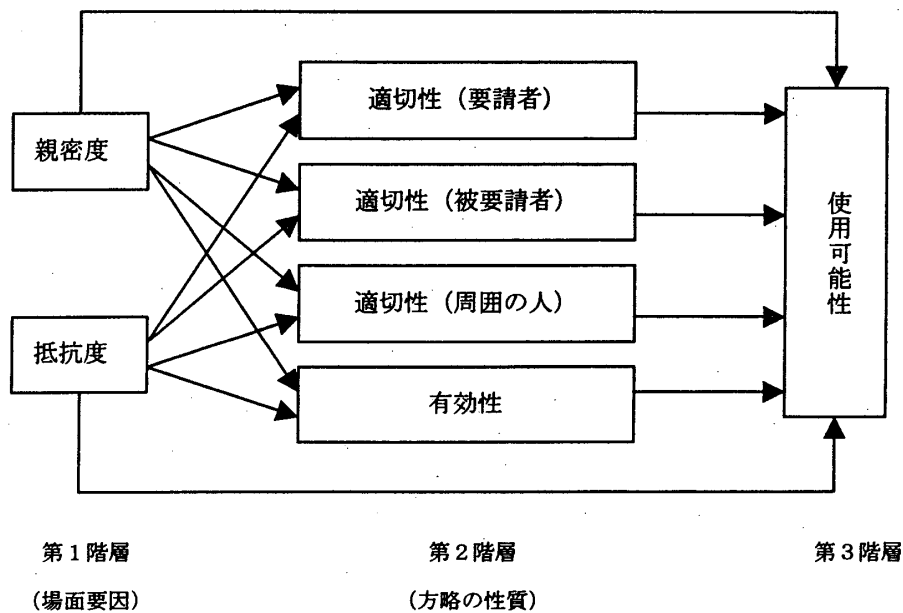


図1. 方略の使用可能性に至る影響過程

考 察

本研究の目的は、場面要因が有効性や適切性といった承諾獲得方略の性質に与える影響を検討し、さらにそれらの性質が承諾獲得方略の使用可能性に及ぼす影響を検討することであった。

実験操作要因が方略の性質や使用可能性に及ぼす影響 (分析1)

分析1では場面要因(親密度, 抵抗度)によって方略の性質や使用可能性が変化するかどうかを検討した。方略ごとの, 要請者にとっての適切性, 被要請者にとっての適切性, 周囲の人にとっての適切性, 有効性, 使用可能性得点を従属変数とした計30回の分散分析の結果, 8つの分析において独立変数のなんらかの有意な効果が見いだされた(表2を参照)。この結果は, 方略の性質や使用可能性が, 場面によって異なることを示唆している。最も場面要因の影響を受けていたのは強硬方略の性質であった。強硬方略は強引に, あるいはストレートな物言いで頼むような, 比較的, 粗野で命令的な方略である。そのため, 多少の無礼を看過してくれる可能性の大きい「親しい人」に対して使う場合(例: 会社の親しい同僚に「ちょっと昼飯代を貸せよ」と頼む)には, ある程度, 適切かつ有効であっても, 「疎遠な人」に対して使う場合(例: 初めて会う他社の人に「ちょっと昼飯代を貸せよ」と頼む)には, 全く適切でも有効でもなくなると考えられる。このように強硬方略の適切性, 有効性は, 親密度や抵抗度といった場面要因の影響を受け, 敏感に変化するということができよう。また, 使用可能性を従属変数とした分散分析では, 強硬方略においてのみ, 主効果が見いだされたが, これは場面によって強硬方略の適切性が変化し, さらにそれによって使用可能性が影響を受けたと解釈できる。

一方, 場面要因の効果が全くみられなかった分散分析も22存在し, 全ての方略の性質が, 親密度や抵抗度といった場面要因の影響を受けるわけではないことを示している。ただし本研究では場面要因として, Cody & McLaughlin (1980) が提唱した6場面次元のうち2つのみを扱っていた。今回場面要因の影響が見いだされなかった方略の性質も, 残りの4つの場面要因の影響を受ける可能性は残されている。

場面と方略の性質が使用可能性に及ぼす影響 (分析2)

場面と方略の性質が使用可能性に及ぼす影響を検討するために, 方略ごとにパス解析を行った結果, 第1階層(場面要因)から第2階層(方略の性質)へのパ

スは, 一部が有意となり, 場面が方略の性質に影響を与えていることが明らかとなった。この結果は分析1とおおむね一致するものであった(すなわち, 分析1で有意となった分散分析に相当するパスは, おおむね有意であった)。ただし第2階層における R^2 は, どれもさほど大きいものではなく, 場面要因(親密度, 抵抗度)が方略の性質に与える影響は, 全体的に見るとそれほど大きいものではないことが示唆された。

第2階層(方略の性質)から第3階層(使用可能性)へのパスは, 比較的有意になるものが多かった。特に有効性からのパスはすべての方略で有意であり, 有効性が, 全ての方略を通して大きな影響力をもっていることが明らかとなった。一方, 3種類の適切性の影響力は, 方略によって異なっていた。ただし, これら6つの分析における各適切性からの有意あるいは有意傾向となったパスの数を数えると, 「要請者にとっての適切性」は4/6, 「被要請者にとっての適切性」は3/6, 「周囲の人にとっての適切性」は1/6であり, 3つの適切性のうち「要請者にとっての適切性」と「被要請者にとっての適切性」が使用可能性を予測する上でより重要であることが示唆された。「周囲の人にとっての適切性」からのパスは, 他者利用方略でのみ有意であり, このような第三者(依頼を仲介してくれる人物)の協力が不可欠な方略でのみ大きな影響力をもつものと考えられる。

総合考察と今後の課題

分析1と分析2では, おおよそ一貫した結果が見出された。すなわち親密度や抵抗度の場面要因は, 方略の性質に(特に強硬方略の性質に)影響を与え, さらにそれら(特に有効性が)が方略の使用可能性に影響を与えていることが明らかとなった。本研究で扱った場面要因は親密度と抵抗度のみであるという限定は存在するものの, 場面要因・方略の性質・方略の使用可能性の関連を明らかにした本研究の意義は大きい。このような知見から, ある単一の場面におけるある方略の使用可能性を, 他の場面に単純に一般化することが適当ではないことが明らかとなった。今後, 承諾獲得方略の使用可能性に関する研究を行う際には, 場面要因と方略の性質の影響を考慮に入れて研究を進めていく必要がある。

最後に今後の課題について述べておきたい。本研究で使用した場面要因は, 親密度と抵抗度のみであり, Cody & McLaughlin (1980) が提唱した他の4場面要因(要請者に対する被要請者の地位, 要請の正当性, 二者関係への長期的影響, 承諾によって得られる要請者あるいは他者の利益)を含んでいなかった。今回の

分析では、いずれの方略の分析でも第2階層の R^2 が低かったが、これは2つの場面要因しか分析に含んでいなかったためである可能性がある。今後は他の場面要因についても検討し、それらが各方略の性質や使用可能性に及ぼす影響を明らかにしていく必要がある。

引用文献

- Cody, M. J., & McLaughlin, M. L. 1980 Perceptions of compliance-gaining situations : A dimensional analysis. *Communication Monographs*, 47, 132-148.
- 深田博己 1998 インターパーソナル・コミュニケーション—対人コミュニケーションの心理学—北大路書房
- 北村直美・谷淵真也・南 花枝・森田知恵子・米澤由香 2000 承諾獲得方略選択の規定因に関する研究 広島大学教育学部心理学科 平成12年度心理学課題演習 I 発表資料 (未公開)
- 湯 永隆 2002 承諾獲得方略の使用に及ぼす場面次元の影響 広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 (教育人間科学関連領域), 51, 印刷中

【補助資料】

個人評価方略因子 (個人評価方略)

- ・「困っている人を助けなければ、いつか自分が困ったときに誰も助けてくれないものだ」などと、世の中の法則を示して頼む方略
- ・「困っている人間がいるとわかっていて、何もするのは道徳心に欠ける」と告げて頼む方略
- ・「困っている人を助けていれば、いつか自分が困ったときに誰かが助けてくれるものだ」などと、世

中の法則を示して頼む方略

制裁方略因子 (制裁方略)

- ・「引き受けてくれなければ、私はあなたを非難し続ける」と告げて頼む方略
- ・「引き受けてくれなければ、絶交する」あるいは「引き受けてくれなければ、あなたの秘密をばらす」などと脅して頼む方略
- ・「引き受けてくれなければ、あなたに対する周囲の評価が下がる」と告げて頼む方略

対人技能方略因子 (対人技能方略)

- ・もっともらしい嘘について頼む方略
- ・雑談をして、気分をなごやかにしてから頼む方略
- ・ストレートに頼まずに、頼みごとを暗にほめかす方略

丁重方略因子 (丁重方略)

- ・礼儀正しい態度で丁寧な言葉を使い、頼む方略
- ・普段よりもまじめで深刻な表情で、頼む方略
- ・「あなたが迷惑なのはよく分かっているけど…」と相手への配慮を示しながら、頼む方略

他者利用方略因子 (他者利用方略)

- ・相手が断りにくい人から、頼みごとを相手に伝えてもらう方略
- ・「あなたの一番親しい人も、私があなたから助けてもらうのがよいと思っている」と言って頼む方略
- ・「頼みたいことを全部引き受けることが無理であれば、少しでもよいから」と妥協しながら頼む方略

強硬方略因子 (強硬方略)

- ・声を大にして、一方的に強引に頼む方略
- ・「～してください」とストレートに頼む方略
- ・「～してくれ」と命令口調で頼む方略